



## ミネスルンド、 匿名の共同墓地

スウェーデン・ティンメナッペン在住

藤倉・カールソン・篤子

職場で親しかった元同僚エバマイが昨年暮れに亡くなりました。彼女はまだ50歳、明るく優秀なアイデアに溢れた独身者、平等でユーモアを忘れない温かい友人でした。5年前の乳がんが再発し、それと戦った末の展開だったので本当に悔しく、職場でも悲しみの小波が長く後を引いています。

再入院後は「家族以外には会わない」とエバマイ自身が希望したこともあり、彼女の気持ちを尊重して親しい友人たちも気持ちを抑えて見舞いには行きませんでした。スウェーデンではお葬式は亡くなってから1カ月後、というのも珍しくありません。参列を希望する人は家族が新聞に載せる死亡告知でお葬式の日時と場所、参加者の服装などについて知ることができます。家族が癌で亡くなった場合、「献花の代わりにがん医療プロジェクトへの寄付をしてください」とポストギロ(振替口座)の番号が示されていることも多くあります。エバマイのお葬式では彼女が残される家族や友人たちに書いた詩の言葉がお花代わりの沢山のろうそくと共に揺れていました。

私の夫は長寿の家系で父方の祖父母は数年前どちらも90歳を幾つか越してから亡くなりました。二人とも元気なころから「神様から御呼びが来たらミネスルンドに入りたい」と希望していたので、住んでいた教区内の教会墓地に火

葬して納められました。ミネスルンド(minneslund)とは辞書を引くと「minneは追憶、思い出」「lundは杜、木立」とあり、沢山の方々ともに平等に葬られる匿名共同墓地とでもいいでしょうか。個人名や家族名で墓を作らない人たちの為に、火葬後に灰壺を埋めたり灰をまく共同墓地の一角がどの教区教会にも必ずあります。灰はその匿名性を保つために必ず親族が同席しない状態で撒かれるそうです。祖父母の灰がこの周辺に撒かれたと分れば人情としてお花をその辺りに添えてしまいそうな気が私もやっぱりします。でも、それでは共同墓地の意味がないという北欧バイキング的な平等観と連帯心でしょう。

スウェーデンでは火葬はまだまだ土葬よりも少ないようですが、火葬にする場合は日本のように骨を残さず灰になるまで焼きます。ミネスルンドはいつも色々な人たちが訪れてくれるので寂しくないなあ…と夫の祖父母は思ったかもしれません。また、教区教会が責任をもって管理してくれるので残された家族にとっても楽だろう、と思っていたようです。教区教会敷地内の土地はスウェーデン教会の所有地なので、お墓を立てるときは土地を借りる契約をします。私の住んでいる教区では借地費を5年とか10年という単位で前払いすることが多いそうです。お



ミネスルンド



遺跡・バイキングの墓

墓の掃除や花の手入れなどは必須ですが、手が回らないと思う家族はわずかな管理費を払って教会に委託することもできます。国民番号を持っているスウェーデンの住民はすべて葬式手数料という目的税をスウェーデン教会に(もちろん生きているうちに前払いで…)払っているの、カトリックやクリスチャンでなくても葬式があげられないという心配はありません。自然の神が沢山存在すると信じられていたバイキング時代にもお墓には石が使われていました。中には象形文字(ルーン文字)でその人の勇気ある一生を振り返る言葉が刻まれている墓石も沢山残っていますが、風化したのか初めからそうだったのか沢山の墓石が寄り合いでも開いているかのような遺跡もあちこちに見られます。無名で無言な遺跡のたたくまいが時を越えて沢山の人たちの足を立ち止まらせるミネスルンドのようにも見えます。